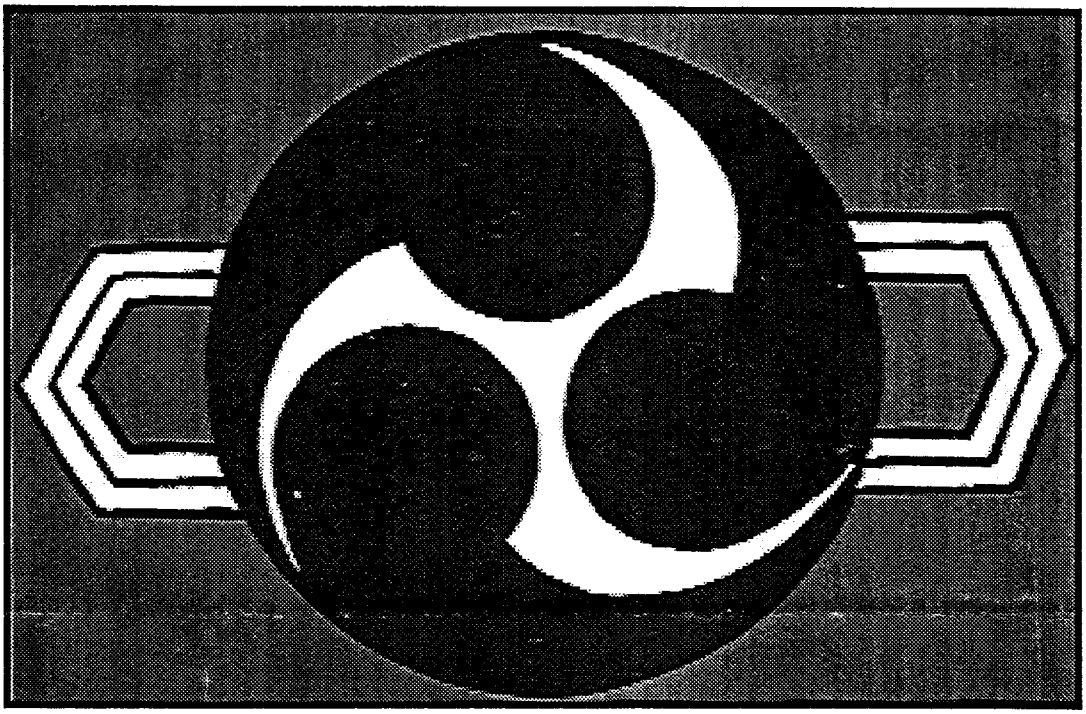
3月度徒歩例会

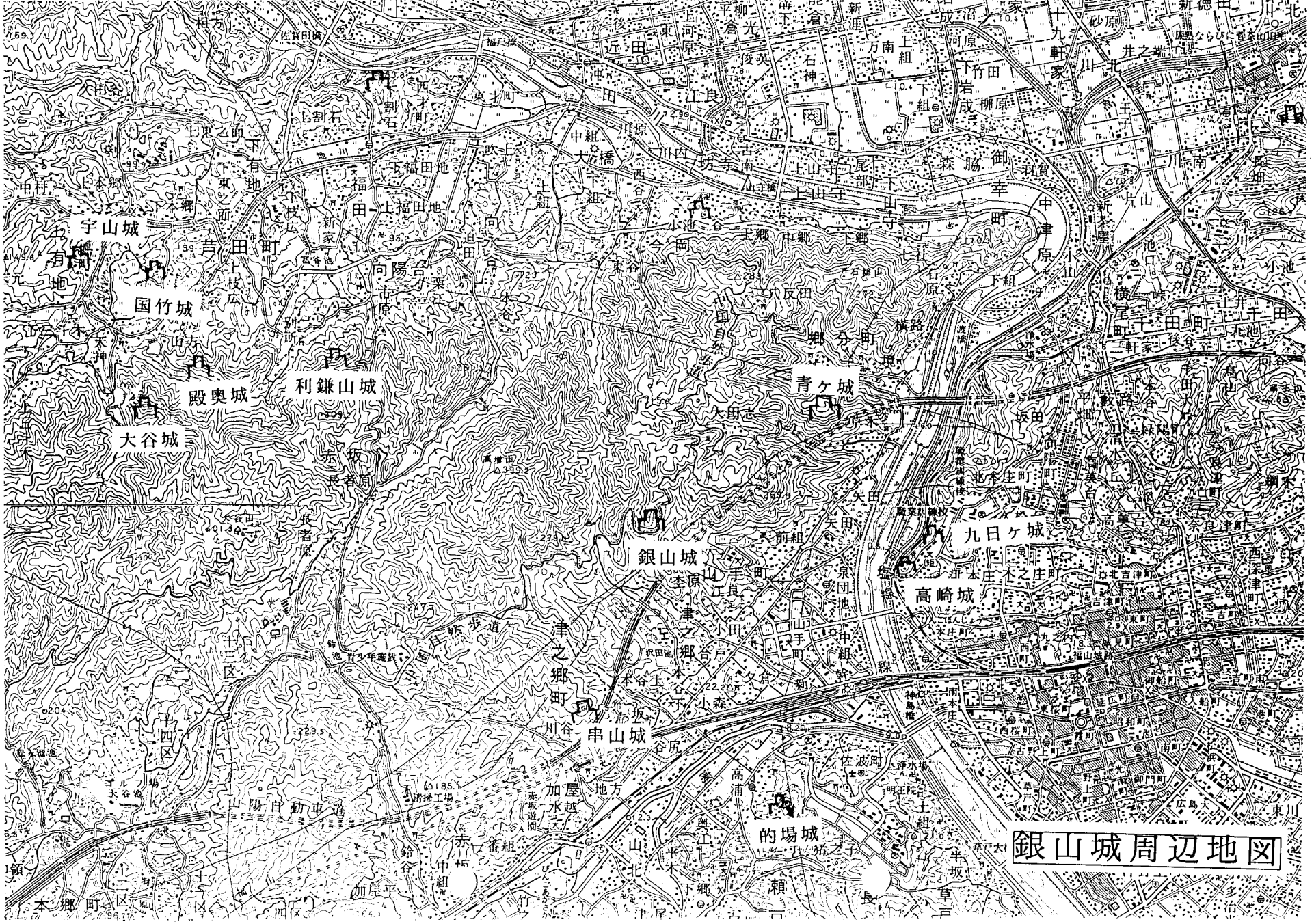
『銀山城に登山会』資料

椙原氏軍旗



椙原盛重　花押

備陽史探訪の会　　城郭研究部会


宇山城
国竹城
殿奥城
大谷城
利鎌山城
青ケ城
九日ケ城
高崎城
銀山城
串山城
的場城
銀山城周辺地図
芦田町
向陽台
中国自然道
郷分町
横路
津之郷町
山手町
泉団地
中組
加屋水越
赤坂
番組
山陽自動車道
十三区
十四区
十二区
十一区
本郷町
加屋平
鈴谷
清掃工場
赤坂遊園
佐波町
高浦
的場
瀬
長
草戸
半坂
上組
平木
下郷
奥江
平
北
山
谷尻
谷
川谷
坂
本谷
上
下
小森
夕倉
釈迦池
池
青少年運動場
長者原
坂
長者原
高増山
△239.2
矢田
前組
泉
塩屋
本庄
本之庄町
北本庄町
南本庄
高美台
奈良津町
北吉津町
吉津
東町
西町
内
丸
福山城跡
御船町
船町
昭和
南町
光
御門町
上町
野上
古野
草戸町
広島大
東川
多治
神島橋
西桜町
浄水場
明王院
上組
下組
横尾町
三軒家
後谷
向谷
高
小池
小山
上井手
千田町
丸池
平数路谷
緑町
陽町
水丘
津町
鯛本
中津原
新茶屋
片山
幸町
御
森脇
尾部
上山寺
下山寺
上山寺
坊寺
南
古
西谷
中組
大橋
下組
上組
吹上
福田地
上福田地
下福田地
新家
広谷池
別所
向陽台
市原
栗江
本谷
迫田
今岡
東谷
小池谷
上郷
中郷
下郷
七社
石原
八反田
石鎚山
中国自然道
大田
木
坂田
前組
矢田
緑町
緑町
緑町

徒歩例会

『山手銀山城に登る』資料

城郭研究部会

1　銀山城の歴史

銀山城の歴史は、木梨杉原氏の一族である杉原匡信が木梨家城からその居城を山手に移したことに始まると言われています。匡信は『萩藩閥閲録』巻六八杉原与三右衛門書き出しによれば、南北朝期に足利尊氏方として活躍した杉原為平の直系とされる人物です。匡信の履歴としては、銀山城築城の他は山手杉原氏の菩提寺である「三宝寺」を創建したと言われること程度しか伝わっていません。三宝寺には昭和二十年頃まで山手杉原氏三代の位牌が存在していたようで、藤井定市さんの著書『備南懐古』には、

元祖　匡信院殿前播州太守法麟正寿大居士
　　弘治二年六月十六日寂
　　当村古城主杉原匡信公
二代　理興寺殿前豊州太守大用永調大居士
　　永禄七年五月十六日寂
　　杉原豊後守理興公
三代　盛重寺殿前播州太守大安宗廣大居士
　　天正九年十二月二十五日寂

の位牌があったと書かれている。

第二代城主とされる理興は、一時神辺城主として備南に覇を唱えた人物ですが、その出自については疑念があります。現代の史書である『福山市史』・『広島県史』は、山手杉原氏説を取っていますが、『福山志料』・『備陽六郡史』・『西備名区』等の江戸時代の史書は八尾杉原氏説を取っています。また、田口会長・立石先生等多くの郷土史家の方も八尾惣領家説を取られています。年代的に考えると匡信と盛重の間に理興を挟むのは無理があるようです。『陰徳太平記』等の史書によれば、理興に子供がなかったことから神辺城の跡目相続が紛糾し、四番家老であった山手銀山城主・杉原盛重が吉川元春の強い推挙で神辺城主となったとありますから、理興は八尾惣領家の出であり、その後を山手椙原氏である盛重が継いだと考えた方が良いようです。私の調べた範囲で理興に関すると思われる古文書を以下に上げます。

○『浦家文書』（大日本古文汨『小早川家文書』（附録））

一四　大内家老臣連署奉書　（備後）　（理興）

就神辺椙原豊後守同意之儀、當城無油断、注進之通、令披露候、辛労之由、被成御書候、御面目之至、弥馳走可為干要之由候、猶隆兼可被申候、恐々謹言、

十二月廿二日　（吉見）興滋（花押）
（青景）隆著（花押）
（陶）隆満（花押）

乃美小太郎殿

（折封ウハ書）
「（異筆）
到天文十五年
十二月廿二日　連署
乃美小太郎殿　興滋」

○『椙原文書』

一四　大友義鎮書状（切紙）　（大内家）　（大内）

毛利元就父子別而被申談之由、尤肝要候、防家之事、義長家督之儀、義鎮存知同前候、弥毎事御入魂可為祝着候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

卯月六日　義鎮（花押）
（理興）
杉原豊後守殿

（注）「萩藩閥閲録」巻六八では、天文廿二年カとしている。但し、義鎮の花押編年から天文廿四年と見る説もある。

第三代の山手銀山城主が、備後の戦国史に唯一人異彩を放つ杉原盛重です。先に述べましたように、盛重は神辺城の四番家老から杉原理興の跡を継ぎ神辺城主となった人物です。盛重の家督相続には吉川元春の強い推挙があり、以後、盛重は元春配下で山陰方面軍の司令官として活躍します。盛重は、豪腕の戦国武将と言われるように、その戦略・戦術能力を山陰戦線で如何無く発揮し、数多くの戦功をたてます。この功績により盛重は、毛利軍中で「伯州の神辺殿」尊称される存在となります。

○『萩藩閥閲録』巻五五

「立雪斎恵心書状」

呉々元理一昨日十三吉田着候間、彼是仕合能下向候間、我等まで本望候
先書にも申候様、元理事、就御用、富田并　伯州の神辺殿江御使ニ被
罷上候而高名候て元就、輝元一段御気色無申計候、併冥加之至候、就其
従大殿折紙被遣候間尤可然存候、爰元於御取合者可御心安　、猶来便ニ
可申候、

恐々謹言

元亀元　　（国清寺）　恵心

十月十五日

就信　申給へ

この差し出し人の恵心は立雪斎といい、安芸吉田の毛利家歴代の菩提寺・興禅寺の住持であり、後に出雲の安国寺や山口の国清寺、香積寺、更に京都五山の東福寺や南禅寺の住持となった高僧です。この当時は、元就の帷幕にあって政治顧問を務めていたと思われます。このような人物から「伯州の神辺殿」と尊称される杉原盛重は毛利軍中で重要な地位を占めていたと考えられます。

盛重は、主に吉川元春の手に属して山陰方面軍司令官として活躍したために、備後の持ち城であった神辺城や山手銀山城は家臣が城代として詰めていたと考えられます。銀山城は盛重の重臣であった横山氏が城番をしていたと考えられます。横山氏は、武蔵七党の一つ・武蔵国横山に住していた横山右馬允時兼に始まるといいますが、その出自は明確ではありません。盛重が活躍していた当時、横山氏は沼隈郡津之郷村に「小森館」という水濠と土居を巡らした居館に住していました。小森館は山手銀山城の滕にあり、銀山城と呼応して神辺城を守る重要な拠点でした。盛重というと『陰徳太平記』にみえる足軽以下のものに昔山賊や海賊であるものを使ったり、忍者を使ったりと無頼の者を好んで家来としていた豪勇の側面のみが強調されています。しかし、「横山文書」に残されている横山政盛宛の書状をみると、政盛の父・資盛の病状を気遣うやさしい一面が認められます。この書状をみるまでは、武勇一辺倒の人物かと思っていましたが、盛重という人物は人情の機微にも通じた優秀な武将であったようです。

○杉原盛重書状（広島県史所収「横山文書」）

備前入道今程失礼気之由候、無心元候、能々可被加養生事肝要候、此由
（盛資）
備前入道へも可被相心得候、爰元弥無異儀候間、可心安候、謹言、
（永録六年カ）

後十二月十九日　　盛重（花押）

横山九郎左衛門尉殿
（盛政）

盛重は天正九年（一五八一）十二月、白州の八橋城で没したと言われています。盛重の死後、家督は嫡子・元盛が継ぎますが、天正十年五月、弟の景盛は元盛が羽柴秀吉に通じているとして、これを尾高城に攻め討ち取ります。こうして家督は景盛のものとなりますが、景盛の謀り事に気付いていた毛利氏は、天正十一年八月三日、白州の佐陀城に景盛を急襲してこれを処刑します。盛重の遺領七千貫は没収されます。この時、杉原氏は盛重の末子・景保をもって家系の存続を許されたようですが、所領は千四百貫に削減され、神辺城や銀山城は毛利方の城番の手に委ねられたのではないかと考えられます。

ここに、山手杉原氏の居城としての銀山城は幕を閉じたさとになると思われます。これ以降、銀山城ではさほど大きな戦いも行われず、関ケ原の戦いの後毛利氏の周防・長門移転にともない廃城されたのではないかと思います。

【山手杉原氏の系譜について】

1) 山手杉原氏の系譜について

【『萩藩閥閲録』巻68　杉原与三右衛門】

杉原播磨守匡信　　備後国沼隈郡山手之城主

杉原豊後守理興　　備後国山手之城主

杉原兵庫頭直良　　備後国山手之城主

山手城主也、元就公所々御取合之時、直良弟播磨守盛重を為名代手勢差添遂其節、勲功不知其数候、盛重嫡男左近進元盛不慮之子細有之家断絶

杉原太郎左衛門尉直盛

永録五年三月朔日石州福屋合戦之時、熊谷信直属、敵多数討捕戦死

杉原内蔵允春良

元春公より春字を賜、春良母者河野通宣に宍戸隆家御息女御婚礼之時、局役ニ御雇之旨、……

杉原播磨守盛重

元盛　　景盛　　景保

▪▪▪▪▪▪▪▪ 部分は、木梨平左衛門家系図より補う

2) 杉原理興(山名宮内少輔忠興)の出自について

a. 『福山志料』

姓は山名とも杉原とも称す。もと芦田郡八尾ノ城主にて、信平が裔なり。長門の吉川長兵衛の「備州旧記」の中に、「忠興神辺城主トナリ、芦田郡出口村八ツ尾ヨリ移ルト云」

八ツ尾城主杉原基康 ―― 時興 ―― 忠興

b. 『西備名区』

八ツ尾の杉原にて土生村淵上と同派なり、信平の末なり、山手の杉原は為平の末なり。八ツ尾の杉原は、杉原姓の根本なれば、木梨の杉原は関東より帰り来りて後、木梨を給わり住せしなり。山名とは本州に事ありし時、先に杉原に約して本城とし在陣せし故、城内に別に館舎構えて在住し、代官を置く。これ宮田なり。山手の杉原は為平の末葉といい伝う。然るを忠興、山手より移るというは、前に言えるごとく、盛重のことを誤り伝えしなるべし。忠興、八尾にありし時は山名といいしか、神辺の山名と敵となりたれば、本姓に復したりとみゆ。

c. 『備陽六郡志』

「八ツ尾の城は、山名宮内少輔理興の古城なり」

d. 『福山市史』

「杉原理興の出自については異説(福山志料は八ツ尾杉原の出と推定している)もあるが、大体山手杉原氏の出と見るべきであろう」

e. 『山城志』第８集　「神辺城主山名理興の出自」：田口義之会長

元々理興は八尾杉原氏の出であったが、盛重がその跡を継いだことによって山手杉原氏の系譜の中に取り入れられた、こう考えた方が良いのではなかろうか。そうすれば地元の伝承も生かされると思うのである。

3)「伯州の神辺殿」杉原盛重

a. 杉原盛重の神辺城相続　(『陰徳太平記』巻三二播磨守盛重継杉原家事

弘治三年(1557)三月五日に杉原理興が病死した。理興に子がなかったため、相続問題がおこったが、おこったが、吉川元春の強い推挙により神辺城の四番家老であった盛重が神辺城主の座についた。

b. 杉原盛重の室

弘治三年、神辺城主となってまもなく、盛重は毛利元就の姪を正室に迎え毛利家の縁族となっている。これ以後、盛重は吉川元春の右腕となり、山陰の毛利軍最高司令官となり活躍する。

c. 伯耆国尾高城と杉原盛重

永録七年(1564)の末、盛重は伯耆尾高城城主に任じられる。これは前年の白鹿城攻めに盛重が抜群の働きをしたことの恩賞の意味もあったようである。尾高城は山陰の東西を結ぶ出雲街道と伯耆南部と備後を結ぶ輸送路の交点にあたり、当時の交通上の要衝であった。ここを任されると言うことは盛重に対する毛利家の信任の厚さが分かる。

e.「伯州の神辺殿」杉原盛重

杉原盛重は、吉川元春に属して毛利軍の山陰方面司令官を務めていた。彼は、その活躍によって「伯州の神辺殿」と尊称されている。

(『萩藩閥閲録』巻五五　元亀元年(1570)「立雪斎恵心書状」国司就信宛)

f. 杉原盛重と山中鹿介

宿命の対決とも言える杉原盛重と尼子の忠臣と言われる山中鹿介との戦いは、盛重が尾高城主となって間もない永録八年の春・富田城への物資補給を巡る弓ヶ浜合戦からから始まる。これを初回として何度となく鹿介と盛重は戦いを繰り返すが、鹿介がいかなる戦術・戦略を用いようとも常に盛重には歯が立たなかったようである。後年、山中鹿介が悲劇の英雄と呼ばれる原因を作ったのは他ならぬ「盛重」であったようである。

g. 盛重の死と杉原家栄光の終焉

杉原盛重が伯耆の八橋城内で病没するのは天正九年(1581)十二月二十五日である。盛重が家督を嫡子元盛に譲って八橋城に移るのは天正六年頃であるから隠居後、わずかに三年で病没したことになる。

天正十年、二男景盛は兄・元盛が羽柴秀吉に通じたとしてこれを謀殺し、家督を手に入れる。しかし、ことの真相を把握した毛利氏は、天正十二年八月、左陀城に景盛を急襲しこれを自刃せしめている。ここに備後の名族杉原氏の栄光は終焉を迎えたことになる。

但し、盛重の兄とされる直良の家系は、萩藩士杉原与三右衛門家として存続している。この家系に「杉原文書」として、山手杉原氏のものと考えられる中世文書が伝来している。

銀山城跡

福山市山手町杢原

神辺から旧山陽道を芦田川を渡って、松永方面に進んで行くと、山手町に入った辺りから、右手に、くっきりと頂きを平らにした山が目に付く。これが、戦国時代、一帯を支配し、後には神辺城主として備南に号令した山手杉原氏の居城、銀山城跡である。

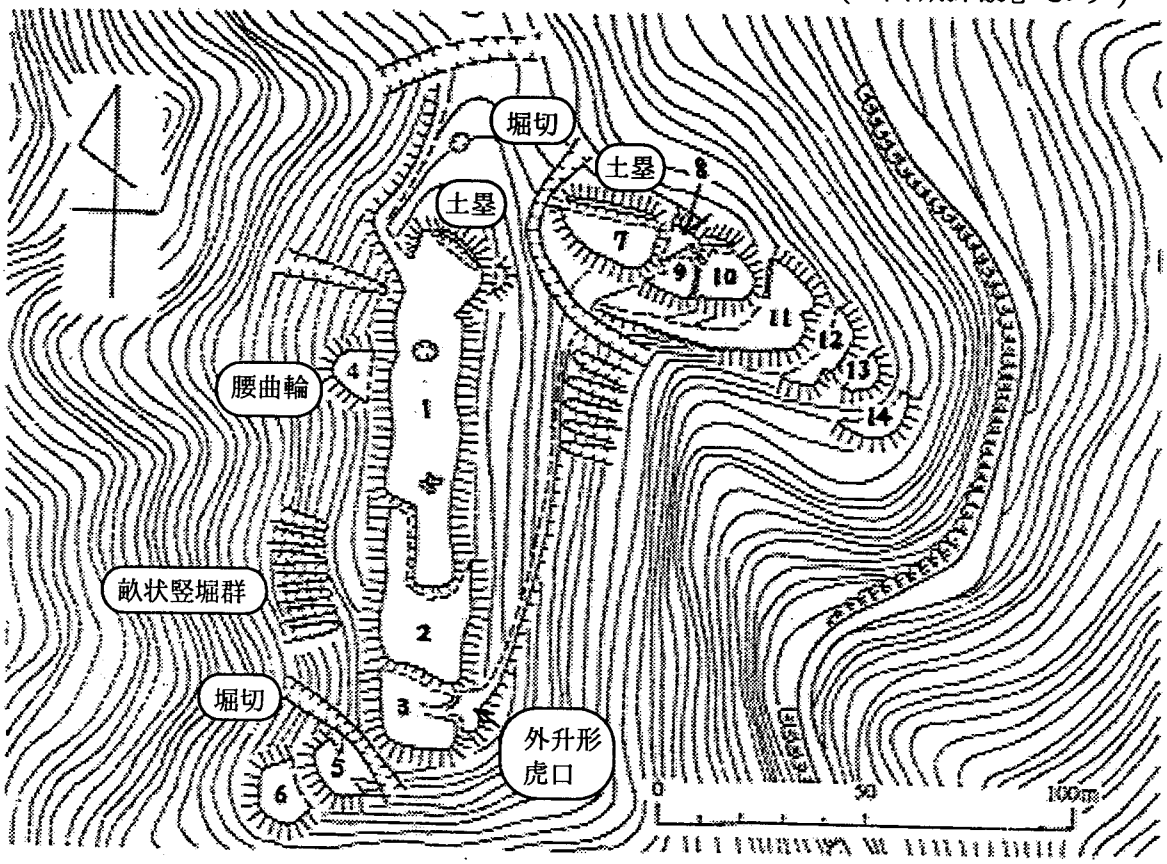
城は、芦田川西岸の山手から赤坂にかけての平野の北を限る、高増山系から南に延びた標高二四九、八メートルの尾根を利用して築かれたもので、山頂から南と東に派生した支尾根上には多数の曲輪跡・竪堀・石垣等の遺構が見られ、福山周辺では規模・構造とも第一級の山城遺跡である。山頂の主郭部は、南に突出した尾根を堀切によって画し、南に三段の曲輪を直線状に並べたもので、総長約一二〇メートル、幅は二〇メートルから一五メートルを測る。最高所の主郭は南北八五メートルのこの城最大の平坦地で、北端には堀切に面して高さ〇、五メートルの土塁が築かれ、中央からやや北と南に井戸跡と推定される窪みが残っている。中でも南寄りに存在するものは、一メートル角位の花崗岩の切石によって囲まれた、福山周辺では例を見ない特異なものである。その他主郭部には西側に半月形の腰曲輪（④郭）と、③郭から西南に堀切を挟んで二段の小曲輪（⑤⑥郭）が築かれ、西南谷筋の押さえとしている。

南北の主稜線から東側に派生した尾根上には、大規模な堀切を挟んで八カ所の曲輪が築かれ、東南の谷筋からの攻撃に備えている。⑦郭は、この曲輪群の中心的な曲輪で東西二五メートル、南北一三メートルを測り、北側には高さ一メートルの土塁が築かれている。土塁はその東に連続する⑧・⑩の曲輪の北側にも残っているが、⑦郭のそれが築き上げによるものであるのに対し、この両曲輪のそれは尾根の一部を削り残して土塁状とした、いわゆる「削り出し」による土塁である。この東曲輪群で特徴的なことは、石垣の多用である。石垣は、⑨・⑩の曲輪の東斜面と⑪郭の南に残っており、中でも⑪郭のそれは最大、高さ三メートルに達する本格的なものである。

この城で注目されるのは、竪堀の存在と、登城道と虎口の関係である。竪堀は、今回の我々の調査によって備南の主な山城ではそれほど珍しいものではないことがわかったが、この城の場合、東南の谷頭と西側の斜面という城の弱

銀山城略側図

（『山城探訪』より）



点に集中して構築されており、その用途を考える上で格好の材料を提供している。

往時の登城道は、東南麓の、城主杉原氏の菩提寺三宝寺からのものが知られていたが、林道の建設によってほとんど破壊されてしまった。それでも林道から上は、わずかにその痕跡を残し、かつての登城ルートを辿ることができる。それによると城への大手道は、東南の谷筋を通ってまず東尾根上の曲輪群に取り付いていたようである。そして、東側の竪堀群の上を通って主郭群南端の③郭に入っていた。ここで注目されるのは、③郭に残る虎口である。道は直接③郭には入らず、まずその東下の小曲輪に取り付き、直角に曲がって③郭内に入っていた。つまりこの虎口は、後世の「外升形」の形式を採っているのである。この形式の虎口は、周辺の山城ではほとんど見られないもので、この城の大きな見所となっている。